負けてはいけない、あきらめてはいけない事実がある

保健医療学専攻・看護学分野・小児看護学領域・瀧沢知世

特別ゲストの先生方、今回は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。
それぞれのお話を聞き、胸が苦しくなる思いです。本気で知ろうとしなければ、本当に起こっていることを知ることはできず、何も知らず見えない世界で、暮らしてしまうことになるのだ、と怖くなりました。

私にも娘がおります。わが子の健康と幸せを願ってのHPVワクチンの接種で引き起こされているこの被害の事実を、見えないことにしてはいけないと私も、強く思いました。
薬害被害を抱えて、長く苦しい日々の当事者の声を、高波先生が、ご自身の体調も良くない中、強い使命感をもち取材を続けてこられたことに、言葉も見つかりません。

忖度や圧力、事実を捻じ曲げる構造は、そこかしこにあり、力を持っていることが、今回の3人の先生のお話からよく分かりました。明らかな障害がなく、仕事があり、家があり、そんな一見普通の生活をしている私たち「健康な人」が多いけれど、だからってそれが何様なのか？と、最近考えています。
知的に障害がある、健康被害があり働けない、そういった人たちもたくさん存在していて、私たちと何が違うのか。幸せや楽しむことや自由を得る権利は、あるのに。他人事ではない、自分事。そんなことを考えます。

私の母は認知症で現在他県で一人暮らしをしています。周りから見たら、できないことやわからないことも増え、困っていることがあるように見えます。でも、本人は困っておらず、住み慣れた場所で自分のペースで生活をしています。小規模多機能型のサービスを受けているので、そのおかげで幸せに暮らしていますが、いつ施設に入所することになり、そこで身体拘束がされるかわからない、まじめに一生懸命生活してきた母の人生において、晩年そんなことが起こってしまったら、どうなのだろうか、と考えます。

実は私の職業は看護師なので、身体拘束を患者さんにしたことがあります。少ない人員で、事故を起こさないために、という理由から行っていました。現場で働く人の意見も感情もわかります。仕方がないこと、危険だから、患者さんのためだから、と納得するのではなく、人として、専門職として、倫理観を高め、看護の質を上げていけるように努力を続けないといけない、と感じました。

抗議や圧力と戦い、小さな声を埋もれさせないために、こんなに戦っておられる方々がいる。
あきらめてはけない、と勇気をもらいました。
本日はありがとうございました。